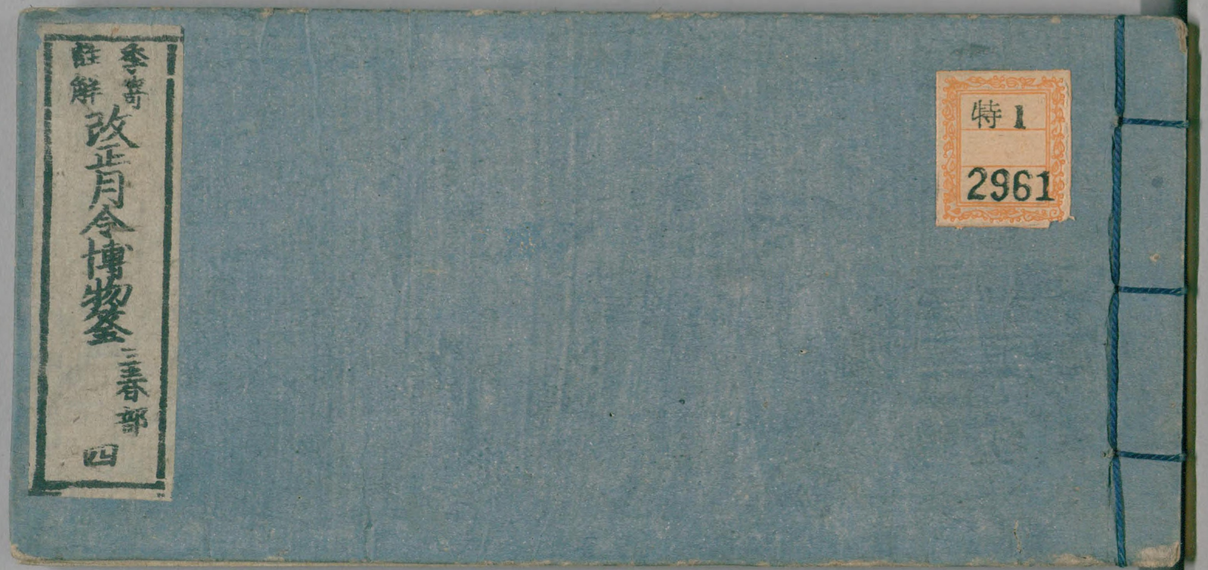
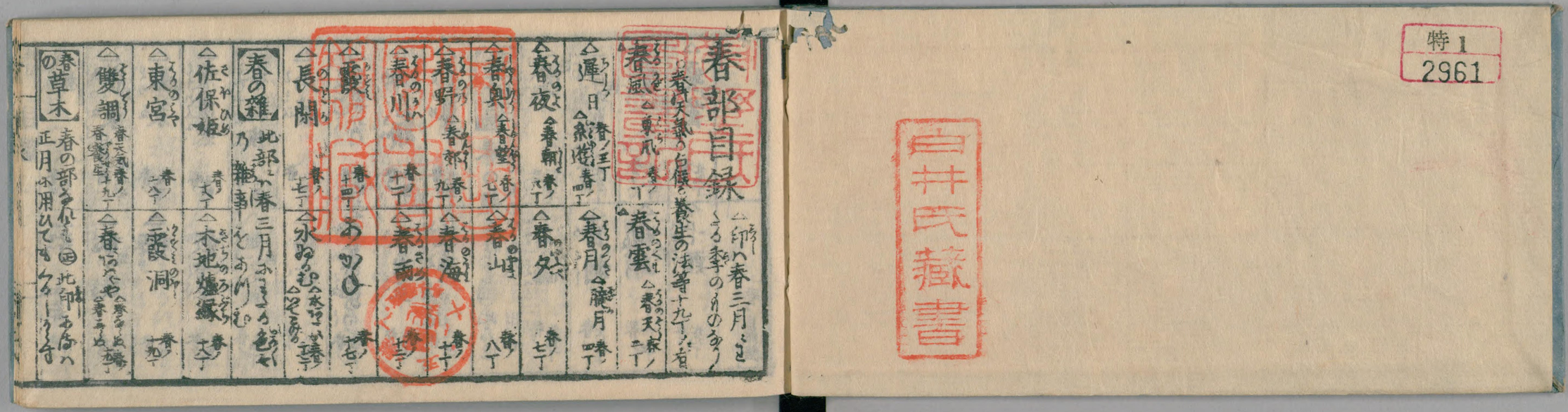


特1
2961

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用



春部目録

△印ハ春三月にまたる季のものなり

○春天氣の白候の養生の法等十九丁ノ有

△春風 △東風 春ノ一丁

△春雲 △春天 春ノ二丁

△遲日 春ノ三丁 △紫遊 春ノ四丁

△春月 △朧月 春ノ四丁

△春夜 △春朝 春ノ六丁

△春夕 春ノ七丁

△春奥 △春堂 春ノ七丁

△春山 春ノ八丁

△春野 △春郊 春ノ九丁

△春海 春ノ十丁

△春川 春ノ十一丁

△春雨 春ノ十二丁

△霞 春ノ十四丁

△長閑 春ノ十七丁

△水ぬるむ △水ぬるむ 春ノ十七丁

春の雜 此部ハ春三月にまたる色々乃雜事をあつめ

△佐保姫 春ノ十八丁

△木地爐縁 春ノ十八丁

△東宮 春ノ二十八丁

△霞洞 春ノ十九丁

△雙調 春天氣 春ノ十九丁 春養生 春ノ十九丁

△春ごとや △春ごとや 春ノ十九丁 △春ごとや 春ノ十九丁

春の草木 春の部なれども 因此印ハ正月に用ひてもよろしかるべし

特1
2961

白井氏藏書

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

△柳 春ノ九丁
△芹 春ノ九三丁
△薺菜 △蓴高 春ノ九四丁
△嫁ガ菜 春ノ九四丁
△椿 春ノ九四丁
△蒲葵菜 春ノ九四丁
△穀精草 春ノ九四丁
△秦菽皮 春ノ九四丁
△雞菜 春ノ九四丁
△山葵 春ノ九四丁
△獨活 春ノ九四丁
△三葉芹 春ノ九四丁
△麥麥の花の句 春ノ九四丁
△海苔類 春ノ九五丁
△鹿角草 春ノ九五丁
△石蓴 春ノ九五丁
△種植 春ノ九五丁

春の生類

春の部にあれども(二)此あるものは二月にも用ゆ

△鶯 春ノ九六丁
△鳥の囀 春ノ九九丁
△百千鳥 春ノ九九丁
△目刺 春ノ九九丁
△鷽 春ノ九九丁
△駒鳥 春ノ九九丁
△雲雀 春ノ九九丁
△干鱈 春ノ九九丁

春ノ目録終

春之部

△此印あるは春三月にする季之

春時令

此部には春三月にしたる季の物をのす

春風

○東風○春吹風はのどるまして志つらなるものなり

春風は地下より吹上て地中の生理を発出し曠野青し是春の應なり○己卯に風あれば其年大風あり

(五)五月西春は南に秋は北いつれも東風にて雨ふるとしたまとしたる哥は俗説といへどもしたるとしたるあり春は木なり南は火なり南風は時節の氣より相生をなす方の風は雨となる方角より時節の氣と生をなれば晴北は水春は木なり水生木と生をなるにより北風ふけば晴なり尤西北の風を乾風といふ四季とりふ晴なり東北の風は常には雨になるといへ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

ども春ハ北風にて晴ゆゑと以て東北とハ雨にならず申酉の風とまぜしゆゑ常にハ晴とはなさざるといへども春ハ南風にて雨となるゆへ未申になるまでハ羊頭といふて雨になるなり

(哥) 拾遺　躬恒

吹風となかいとひそん梅乃ゑ
ちりくつ附そ香はまさりける

同　春風不分処　後京極

おしなべて民の家ともおなびき
君が御代にハ喜ぶぞそふく

(詞) 朝氣。あさぐち。あさぐら。

(俳) 春風やこ縁の松ゑ清る　鬼貫

(詩) 春風　五字對句

煙花宜落日　春風開紫閣
絲管醉春風　大樂下朱樓

(詩) 春風七字對句　詩礎

只言啼鳥堪求侶　搖春風
無那春風欲送行　野外昏
春風夜動蘿衣薄　度春風
芳樹朝催玉管新　逐春風
霽日滿江寒漏靜　動陽春
春風遶閣白蘋生　待落梅
寒雨送行千里外　任好風
東風沉醉百花前　舞東風

(詩) 春風ノ詞　高遠

明月斷魂清靄々平蕪歸路

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

緑迢々 此二句春月人生莫遣ノ對句ニ出ス

頭如雪縱得春風亦不消 年ヲ ヨセテ

頭雪ノ如クナルヤウニナキ用心アレ
頭ノ雪ハ春風ニモキヘザルゾ

春雲

風と同じ西風吹ケ
しては先雲西より東へ行

又降晴とある事風の方角と
同じ西南より東へ行と出雲と
いふ晴なり東北より西へ行を
入雲といふて雨なり或ひは東南
東北より雲と入るも雨西北
西南より雲と出るは晴西南
とへども南へより未申のあいだ
より雲出ると沖氣といふて雨なり

(詩)とはふんとくれども強かはらんる乃の岩の花のしらべ 法皇

(詞)まなびく。なびく。そくま。そ
こて。くも間。ゆれ。ふ。雨をも

春天

(詩) 草庵集

春の空はいづまのどかに
朝ぼらけ霞晴てく田子の浦に
おおてこれは山の端にも

(詞)のどかなる。うらくか。お霞。朝日新

(俳)春の空。細さ出の月光 其雲

(詩)春天五字對句 同上

碧落三天外 山川乱雲日
ヘキラ ムラサト デンノホカ サンセンミダレウンジツ トヲクミヘワカズ

黄圖四海中 樓閣入烟霄
クハウト カイノウチ ロウカクイルエンセウニ タカドノオヽソラニイル
天子ノ宮城

(詩)春天七字對句 詩礎

雲斷岳蓮臨大路 樂春天
クモタヘテガクレンノヅミタイロニ タノシムシユンテンヲ コロウキタツ
高山ノ名 都ノミチ

天晴宮柳暗長春 兼煙霞
テンハレテクハンリウクラシチヤウシユン ウクエンカヲ カスミ
禁中ノヤナギ 殿ノ名

山河杳映春雲下 拂春雲
サンカヨウエイヌシユンウンノモト ハラフシユンウンヲ
ハルカニウツロフ

城闕參差晚樹中 入洞天
セイケツジンサタリバンジユノウチ イルトウテンニ
カタヽカヒナル 仙宮ノ下

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

春日

(旬) 北山殿 為世

[illegible]

兼久百首 忠房

[illegible]

(詞) [illegible]

(連) [illegible] 宗春

(俳) [illegible] 鬼貫

[illegible] 嵐雪

(狂) [illegible] 教二

遲日

△[illegible] △暮 [illegible] △暮 [illegible] △春の日 [illegible] 右[illegible]

[illegible]

(旬) 新古今 [illegible]

[illegible]

六百番哥合 有家

[illegible]

万葉集

[illegible]

(詞) [illegible]

(俳) [illegible] 重五

(狂) [illegible] 燕村

(詩) 遲日五字對句 同上

彩雲歌處斷 遲日暾方照

遲日舞前留 高齋淡復空

(詩) 遲日七字對句 詩礎

挑源洞裏居人滿 淑景移

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

春　時令　糸遊　春月　春ノ四

桂林山中佳日長　仙山

春風自信牙檣動　ホハシラ

遲日徐看錦纜牽　チヂツヤウヤクミルキンランラニクヲ

迓春遲　イブカルハルノヲソキヲ

對斜暉　タイスシヤキニ

日光遲　ジツクハウヲソシ

糸遊　ヤウヤウ

△遊糸　春の日のどかな時空を見えて糸の乱れるやうなるといふ

△陽炎　野馬　日かげに埃の乱れて馬の走るがごとし　○荘子に野馬は塵埃なりとあり

（哥）六百番　定家

くりかへし春の東遊賀世屋をおるしこどりのこゑにはるゝもしん

春月　△朧月　○春の月はおぼろにして艶なる物へ

（表）新古今　大江千里

ぬりもせぬ黒ぬりもたてぬ夜の撞月よりにしくものぞれさ

同　源具親

難波にて霞ぬ浴はしまてこそうつるもしくもる徐月夜に

夫木　春山月　入道摂政

しむろ山まつのかけてる志ゝ山ハ月にうつろふ霞なりけり

同　後九條内大臣

源き夜の春志りけんいかしの春乃あふさの月はうつりし

同　定家

たにしらぬおぼろ月夜は霞こそ茅のたしきをばこれかたつけん

續古今　花洛春月　家隆

春やとれ花の都は名のこして雲ゐの月は風もみなけど

風雅　河上春月　有無

おほとしの宮治のつくりぬしかな川春とみて月ぞかをかる

夫木　為氏

そにしろ春の霞ぬ笑ふすやおぼろ月夜乃名をとゝむらん

同　霞隔月　宣房

見る程もそにに霞の為ぐろまじ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

春 時令 春月 春ノ五

ひかりにあらぬ 去れたるの月

詞 霞にくもる。霧のそこ。夜半の月。朧月夜。霞の春。のどる。おぼろに霞る。曇りもせぬ。相思ふ比。春れおくひ。心はくし。雪けの月。かきみの袖。なにかとむ。おぼろ

連 霞ひとも雲とは生き月 紹巴

俳 霧に合ぬ月 霞や朧月 其角

九春は二朝霞ろ朧月 十磨

天の原おもへは月や花の色 宗因

子云の夜乃月に霞むやきはぬ 三州

詩 春月七字對句 詩礎

何尹天明坐莫辭 懷清霄

春城月出人皆醉 月朦朧

明月斷魂清靄々 照野梅

平蕪歸路綠迢々 影含烟

詩 春月五字對句 同上

苔澗春泉滿 琴伴前庭月

蘿軒夜月閑 酒勸後苑春

詩 春月詞 劉方平

更深月色半人家 北斗闌干

南斗斜 夜更ルニシタガヒ月モ傾キ星モウツラフトミ 今

夜偏知春氣暖 蟲声新透綠

窓紗 秋ノ月トチガヒ夜深シトモアタハカエアリトソ

詩 同 諸光儀

映門淮水綠留騎 主人心門前水流

緑リニ風景ヨキニオホヘズ馬ヲトヾメタ 明月隨良椽春

潮夜々深 月モ君ニシタガフテ西ニユキ潮モソフテ夜

夜ニフカタミツルトナリ

春ニ夜 夜

(方) 續後撰 久我大政大臣

天れ東霞ゆるくさ

風に月のかつらも花の香ぞ[illegible]

(詞) 霞む。山の端。霧む夜。夏なり。

ゆつきの花。[illegible]ハあやぎ。ゆつ。それもかぬ

(俳) 獄夜やむ人がこゝる[illegible]

(狂) 人目さへそうゝくちゝ春のよのおぼろ月夜に志くものは 可由

春朝

(詞) 新古今 藤原家隆

霞ゝ川末の松山おろ

くゝ波にさゝあらく横雲のそら

(詞) 春の曙。かをめる電。のぐけさま

の朝。[illegible]。[illegible]。[illegible]

霞浦。末の松山。[illegible]。柳の色

(俳) 朝の間の梅ゝ香も来て[illegible] 移竹

(詩) 春朝七字對句 詩礎

華堂翠幕春風至 曙光寒

繡閣金屏曙色開 送曉鶯

春浮玉藻寒初落 月未収

露拂金莖曙欲分 入晨遊

(詩) 春曉ノ詞 孟浩然

春眠不覺曉處々聞啼鳥 春ハ子ムリ

多キユヘ夜ノ明ルヲ知ラズ鳥ノ夜

啼クニフトオトロキ目サムルゾ

来風雨聲花落知多少 夕雨風ノオト

ヲキイタカ定メテ花モヲチチリニシト思フナリ

春夕

春の夕ぐれといふなり

暮春ゝ[illegible]春の末ゝ

(詩) 王葉 乃子

百子為声のごかて遠をの

山ハ霞める春の日ぐらし

(詞) 夕ぐれ。[illegible]。[illegible]

夕霞。夕日かと見る。[illegible]

(連) 梅ゝ香ハ[illegible]月夜 不知

(俳) 淋[illegible] 五綾

(狂) 山寺の[illegible]夕飯[illegible]入相

[illegible]前大僧正慈圓

(詩) 春夕七字對句 詩礎

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

綠水殘霞催席散 隔暮雲
畫樓初月待人歸 夕陽遲
小苑迴廊春寂々 散餘暉
浴鳧歸鷺晚微々 目覺閑

春興 春野山を遊びて興をもよほす事なり

(詞) 新古今 家隆
おしみぐちもとこともしらぬ行人は
花の宿かせ野べの鶯

(詞) 梅堂柳下花。花まさらび。野べ

春望 春のあまきは海川野山ともおもしろくなぐるのぞむ心を
夫木 羇中眺望 有家
むさし野くのべの草木はめもはるに
そらにみどりの色もつれども

(詞) ちるか。幾度もかとむ。かとこそ行

春の山川。そのうれる。詠光やる。
みもとこれ。鶯の春。なるめも生れ

(詩) 春望五字對句 同上
白雲回望合 城闕千門晚
青靄入看無 山河四望春

(詩) 春望七字對句 詩礎
白蘋楚水三湘晚 樹中分
芳草秦城二月初 春色明
近郭乱山横古渡 景物滋
野莊喬木帶新煙 接人烟

(詩) 曲江春望 唐 盧綸
菖蒲翻葉柳交枝暗上蓮舟
鳥不知景 曲江ハ禁中ニアル江辺尤ヨキ所ナリ柳モ枝シ

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

ゲリ菖蒲モ葉サカヘテ夏チカク春モ末ニナリ采蓮ノ舟ヲ催スコロニモナレリ

更到無花最深處玉樓金殿影參差

花チリハテヽタヾ見ルモノハ金銀ヲカザリシ樓殿ノカタタガヒナルカゲノミゾ

詩 西亭春望 西亭ハ西宮ト同ジ宮女ノ居ル宮殿ゾ 王昌齡

日長風暖柳青々北雁歸飛入窅冥

春モ半スグルコロ雁ノヲノガ古サトニカヘラント雲井ニトブ之

岳陽樓上聞吹笛能使春心滿洞庭

笛ノ音ヲキクニツケテ故郷ヲ慕フ心イト切之

春山

春ハ艸木もさらえて山のあらきおりしろさ事なり

詞 拾遺 忠岑

春ゝ山いふばかりにやこそ山も霞ゝてけさはこゆらん

夫木 春山霞 家隆

佐保姫の名にあらはる山なれどけさもかをみれ衣ゝ川なり

山家 深山不知春 藤原公重

雪かゝて外山の谷のうぐひすとはふもとの里ハ春やつぐらん

詞 春の山遠。山の端うもむ。遠山うもむ。影のもとに雲。こゑりのみ谷のうぐひす。春の山路。やさしはや。よしの山。とあり山。山ましぬ

俳 地つきの山や霞のうるれしま 立圃

名ふもうとれは山のやまれ 紫柏

狂 四方山ハ霞の衣ゝ川をうと雲のすゝこれかゝる長宋さ 常磐

詩 春山五字對句 同上

緑野明朝日花雜重々樹

青山澹晩煙雪軽處々山

詩 春山七字對句 詩礎

井轉轆轤千樹曉滿春山

鎖開閶闔万山春隔暮雲

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

遠山積翠横海島　五嶺春
殘霞飛丹映江濱　花滿山

詩 春山ノ詞　劉商

君去春山誰共遊鳥啼花落水
空流　君カヘラバ花鳥ノ風景モモノサビシク流水ノミアリテ物
如今送別臨溪水他日相
思来水頭　今溪水ノアタリマデ別ヲ送リ来後日此流水辺ニ相思ヘトナリ

春野

哥 万葉　春のくに

我そ生ぬ夜ゆゑ一夜孫にたり

詞 春ぞ。春夜にそむる。ゆゑくらし。道の辺。みぞりそふ。むらく。おほ夜。おぼろ月。かとぶ野。見まくに。まくもえ。沙頭とり。かとみ。雲間。

ろな。ゐんさ。子此日。つぐる。
しみ。しらび。野遊。美鈞。
糸花。さくら。雛子。雲雀。
春夜。梅。柳。馬。ほくじ。

俳 むしつてはなく　春乃夜　來山
春ふさや　[illegible]　桶　黛山

詩 春野五字對句　同上

臺榭春光媚　野竹池亭氣
郊原遠樹平　春花澗谷香

詩 春野七字對句　詩礎

聽雞曉闕疎星白　落芳塘
走馬春光細柳黄　入平蕪
田夫就餉還依草　野外烟
野雉驚飛不過林　春色深

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

春郊 春の野乃事なり

(哥) 六百番哥合 隆信

うなゐ人のたれ心のかたひきて
別ぬる野邊のたるのかげかな

續古今 柿本人麿

夫に來て春日の雪をみるをば
小もりがうへに霞たなびく

(狂) 高菜かうすこれ[illegible]
つむ[illegible]

(俳) 探鶴さらくや[illegible]

(詩) 春郊詞板粹

水遶江渠漸有聲氣融烟
塢晚来明 江渠ノ水トタルニシタカヒ 水声キコヘ野辺モ春ノ氣令ユキワタルヅ

春海 春ハかすみたなびきて
海のけしきものどかなる

(哥) 四季百首 定家

白菓の白ひし秋も忘れ果
あふてふ岩の春のうしり風

(詞) 春のうみ。霞たなびく。とかめる。霞のひま。霞にてらさ。浪の花。[illegible]。霞をもとる。[illegible]上の[illegible]。緣なる。

春の浦く。四の海のよう。

(俳) ちる紙のぬれをうぐるゝ春海 花縣

(詩) 春海五字對句 同上

月明三峽曉 川ノ名所
氣清連曙海

海深九江春 川ノ名
雲白洗春湖

(詩) 春海七字對句 詩變

山入白樓沙苑暮
渡江春

潮生滄海野塘春
遶春流

雲夢夕陽愁裏色 所ノ名 ユフヒ
染湖波

洞庭春浪坐来聲 夕地ノ名
洞庭春

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

春川　川ニ梅櫻ノ水ニウツリテ美シキ景色ヲイフ

（哥）　公朝

六田川岸の柳のうつれ桜
折くみてこる波ここちこそ

（詞）春の日のうつり行ほどのあはれの深さ。折くみてこる波。岸の柳のうつれる水。折くみてこそ。せうそこがたき。岸のやまぶき

（俳）川そひや霞る緑のつまり里　仙鶴

（詩）春川七字對句　詩礎

樹色到京三百里　渡水人
河流歸漢幾千年　逐水平

湘潭雲盡暮山出　盡清流
巴蜀雪消春水來　弄晴川

春雨　春雨ノ音ヲイフ

（哥）建長百首　良教

春雨のうるほしそへる柳糸
うつりてこくる玉川の水

新後撰　廉春雨　大政大臣

世にふるはうきものなれやふるにふる
袂うつらぬ春の雨かな

夫木　旅春雨　知家

旅衣ぬきてそ寝よもくさ
露よりわけてそこさえぬらん

（詞）梅花　こゝろ。志をれ。れや。志ぐく。それ哉。そぶる。かさくらに。かさゝれて。かゝれて。そゝぐ。り面。衣ゝる。ゝの。春雨。春のおり。あけさこう。せて。春雨。めぐむ。本。霞よう後。くるゝ。もりぬる。花。ゝね。春のさ。ぬる。ゝもりぬる。花と。ゝむ。ゝ。ゝる。春。ゝ。ゝ。風雨。風。ゝ。ゝ。糸。なり。ゝ。彩。

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

糸あり。笠かさもとろもあへぬ。ひぢ笠の夜。（係夜といふ）袖の紀（日上）夕雨れ入れりさ。夜の日ぐらし。夜雨の花。夜夜。閑林しき。灯のきえりも志ぬる。軒夜そくぎ。彩れかあり。彩の糸あり。彩の常。末の下霧。旅。椿衣。志ほるし。笠れ志ある。笠の春夜。椿の長夜。憲 待人のさハつゝ。来ぬ夜ことける。涙者を志る夜

（連）春夜は聖山をそむるこれ沙 宗養
春夜のおとはのさはの竹をふ沙 紹巴

（俳）春の夜花をいとの花狩沙 宗水
春夜やあらぬ家にもうらん桶 來山
河夜に花ゑぬ人やあれの夜 其角
春夜やまはらひ多き兒の髮 十磨

（狂）かきくもり風をかる春れそらへさびしさまはる夜中ちらく 走帆

（詩）春雨五字對句　同上

野（ヤ）籠（ジヤウ）濃（ジヤウ）花（クハ）發（ヒラキ）海（ウミ）暗（クラン）三（サン）山（ノ）雨（アメ）
春（シユン）帆（パン）細（サイ）雨（ウ）来（キタル）花（ハナ）明（アキ）五（ゴ）嶺（レイ）春（ハル）

霞（かすみ）

△春霞　△初霞　△一かすみ
△霞洞（かすみ）　△霞海（かすみ）
みなし　△霞網（かすみ）　△霞汲
仙人の酒と流霞と　△霞衣（かすみ）
ふ見なし　△霞袖（かすみ）
△八重霞　八重にかすみのこゝろもの
△鐘かすみ　分かれ霞のこゝろ心をいふ全く
○霞関（名取）　○霞谷（帝のこゝろ）以上二名非季

右いづれも霞のことゝ○春の時空中おぼろにして曇るり如なるをいふ本字は靄とす或は蒙とかなりしなかとみと訓ぜるなり

（連）四方の海ぬるもかゝや霞　肖柏

（俳）武蔵中に今朝一ちの霞かな　無名氏
ふ山里のあり隣ずかまかすみ　立圃
ハ松とおてたれへ志ことむ霞かな　嵐雪
網ひ山ぬるあり朝かすみ　十磨

（哥）夫木　定家
みよしのハ春れ霞の立所にて
清ぬみきゆるこゝろの白雪

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

同　野径霞　仝

[illegible]

建保百首　海霞　仝

[illegible]

建暦哥合　山家霞　為家

[illegible]

夫木　海辺霞　参議為相

[illegible]

續古　朝霞　家隆

[illegible]

夫木　河辺霞　成茂

[illegible]

建保哥合　野霞　順徳院

[illegible]

遠さる。[illegible]。霞む[illegible]。堀
[illegible]の煙[illegible]。浦く霞む。関関
[illegible]。霞に[illegible]。霞と[illegible]
旅人　森　森の[illegible]。風[illegible]霞。
里里の煙[illegible]。里遠く[illegible]。
我[illegible]里[illegible]夕霞　河　河[illegible]の[illegible]。
霞に[illegible]。河柳[illegible]。岩[illegible]
[illegible]。橋　霞を[illegible]。霞に[illegible]
[illegible]。霞に[illegible]。霞て遠き川[illegible]
日　長用[illegible]。霞を[illegible]。[illegible]
[illegible]。雨　[illegible]。霞も[illegible]
[illegible]。花　花の[illegible]と
[illegible]。霞[illegible]柳　山[illegible]の
柳[illegible]。河柳[illegible]。霞に[illegible]。風
[illegible]。梅　梅[illegible]の梅[illegible]。立
枝も[illegible]。霞の中に[illegible]　春日
松　風[illegible]。松[illegible]。檜原　[illegible]
[illegible]。[illegible]霞に[illegible]。[illegible]
[illegible]。竹　[illegible]の[illegible]。風[illegible]

居所霞の窓。かれむ朝堂。花のふかく
かをむ。霞む垣根。衣霞の衣。佐保
姫の衣。かしみの袖。旅所山のかすを
しけまるの。古里の宅かをむ。行方は
かぬ。都の山とかくを 無常所辺の霞。
山の霞 何しも無常の 戀をしれぬ意。
あらうる。孫めゆる宿の樓かをむ。
あさりとたちなるでそそ

(狂) 九重を春の霞のあるの目に同
たなりてやけふのどうなり 女風

見なくて雲のうしれもとうしきに
なふを始まへて霞ふらん 法心上人

○詩に作る霞と本朝の哥に
詠ずる霞といちがつり歌連俳に
詠じて春の季に入るに蒙といふ
そのみて霞と訓ず春の比天
氣の外るをいふ又詩にはくれ
霞は朝霞晩霞のるい本朝に
ていあさやけ夕やけの事にて
今いふかをこの事にていなし

霞 是は詩につくるかすみなり
本朝俗にいふ朝やけ夕や
けの事に○日のてるとれ東の方
赤くしてきへぶるは早く早くきゆる
は雨ふるにそし一面にあるれは
二三日の内に雨ふるなり日
の入るに西赤く南へまわる
は晴なり○かすみの事委し
くは本篇博物筌といふ書
物にのぶるゆへあらに畧れ

(詩) 霞五字對句

霜空澄曉氣 ソラ
聖藻無寒露 天子詩文
霞景望芳春 カケイカヤクハウシユンニ
仙杯落晩霞 仙人ノサウキ

同上

(詩) 霞七字對句

雲開日月臨青瑣 ウモヒラケテ ジツゲツノゾミ セイサニ 宮門ノ名
巻曙霞 マクシヨカヲ
風巻烟霞上紫微 カセイイテ エンカノボル シビニ 宮殿ノ名
晩霞多 ハンカオホシ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

遠山積翠横海島趨紫霞
殘霞飛丹映江湄向晩霞
仙菜

△長閑 △暖△温△麗○春の日はさむきあつきのうしひもなく天氣ほどよく和暖ふなりしるをいふ麗も同じ心あらく百花咲乱まてうるわしきと云心とぬゝめり

(家) 玉葉 永福門院内侍
をちこの花乃かゝりもやゝ見えて
ゆる霞のうしそのどけき

(詞) 夕日。春柳。詠人。うらゝ。眠胡蝶。霞。山の端。光のどけき。松。前る前草。鳥。春の日。花。蕉。谷の戸。出る鶯。桂。糸。

(俳) 時澤風。私のどけき和田の原。うらゝかや田のあぎしるなれ 一有

△水ぬるむ ひてこけるハ水あたゝ春の氣をぬるむ也

水ハ陰氣のものゝ冬ハかくまゝて氷となる春の陽氣と得てゆるむものなり

(俳) 水ぬるむ はいふ事もあるべき 阿離

(詩) 水暖五字對句 同上

春風増風色 川原通霽色
麗日發光華 田野徧春容

(詩) 水暖七字對句 詩礎

旌旗日暖龍蛇動 居住閑
宮殿風微燕雀高 雲過遲
芳郊緑園春時散 趣轉閑
復道離宮烟霧生 玉生烟

春雜

此部ハ春三月ニ至る混雜の物とのす

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

佐保姫 春の造化の神也 かたちあるにあらず
天地の色をおりなすをかりに
おづまさるなり 袖下集に四季
の姫の歌あり 佐保姫の吉野山
に詠られて代々を守るや 春の宮
(歌) 草庵 さほ姫のあつもきさらぬ名も
しるし 霞にさゐる春のしら芳 頓阿
(詞) 春の雨 ゆふの風 夕まぐ 佐保姫
の霞の衣 さほひめの神 世界なる也。
花咲山のどろぐらしらさえうへ 雪
(俳) 佐保姫の家作りに也 霞 宗俊
(狂) さほ姫の霞の衣ぬひさし 寄
けさ仕すとうつ 走帆
木地爐縁 数寄屋かこ いの炉に茶人
冬は炉に塗ぶちを用ひ春は木地を
用ゆ春は自然とやうにかつ
塗ぶちにてはやうり 又へ
ぬぐるしき 紙にてなり
東宮

春 とうぐうとしても春は東と主
宮 どるゆへ季なりいまだ御即位
なき親王の御
事を申す也 霞の洞 天子の
御位を
をぐらせなんと仙洞と申奉るその
御事なり季に用る霞の洞は仙
人の居所なるに目
出度たらへ奉るに 雙調 春の調子
なり春は万
物を生ずる其音は木音なり内裏に
て舞楽ある時春はこの調子なれば
春にあらずや (歌) 雪玉集 いまの かみ
ふるれとうへを 時もかへ
あらは荒田のまゐにあらずや 春
ならぬ (歌) 伊勢物語 月やあら
ぬまゐや むかしのまゐ
ならぬ我身ひとつ
はりとのこふしてく 春ならぬ
(歌) 俊成卿百首 まゐらぬ紙衣の
雪も我ひとつ清ぬ地はふりし

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

春養生

素問曰く春三月これを發陳といふ天地共に生し萬物以て栄ふ夜ハ臥し早く起き庭にひろ〻歩し形をゆるやかにして志を生ぜし免よ生じて殺すことなかれ賞して罰することなかれ是養生の道也

春天氣

春の初甲子晴れハ天氣はじめて雨ふれハ春中雨多し此日ばかりの事にもあらず春ハ物のはじめなれバ年中の風雨もこれに准ずる事多し殊に甲子ハ干支の始なれバ此日の晴雨も多くつゞきものゝ春の南風ハ雨をまゝて春の雨ハ歌にも詠如くしめくと降續くものゝ晴んとそハ四方ハ山の根雲ちぎれ立登るゝ此時風ハ東に替るべし又北ハ吹上て日和になれハ晴ると云共寒しくて四五日の内まゝ雨なり

春草木

此ぎ春の草木なれバ四如此あるしかるに正月の季に用ゆるともしかるべきかと

柳

△楊ともいく △あぢり柳 糸のかゝるゝ柳 △川柳 枝ミドかゝして水辺に生ずるやなぎなり

△川ぞへ柳 同しく柳に△青柳 △青柳 △たゝ柳 △こぶ柳 谷にでゝる山

柳異名 金絲。白綿。点花。弱艸。樹聖 △門の柳 人ぐちに柳と五本うへてこゝろ

△五柳先生とこゝ柳の異名とかゝ柳と名ぐ △玉柳 玉といふハ柳をもちゐるゝ △風見草 △風無艸

△根水草 △めぐり柳 初春に葉のいづるころをいふ △柳の髪 柳のうるわしきこと女のうるはたらくはしくるゝ △柳ごし たとやうなる女 美女のこゝのやうに △柳の眉 美女のまゆにまゆにくはゆるゝ △春すゝき

万葉 人丸

鮭なくむへこのまゝの川なるぎ 絲もころこれとあらぬ君かを

堀川百首 俊頼

もかり私かつゝ志めなハこゝろせよ 汚ぞひやなぎ風みたるみを

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

文治百首　定家
遅くとはみどりの色にしるきかな
春ふかゝるの庭乃あ我中だ

夫木　岸柳　伊勢大輔
春柳のいと我緑ふかひくふかい
さし近くこそちくまわけ

夫木　杜柳　匡房卿
ちくとへてゐるそしどそしふまでとれ
いとよりかゝるまゝ柳のもり

建長千首　河柳　光俊
せ我そやそ我かさまきれい玉川の
河ぞひ柳　えぞぞるゞ我く

建長百首　水卿柳　仲正
里手れ淀の河邊のうゑ世なぎ
わづへちぢとりかつらせよこら

夫木　水辺柳　家隆
立田川世まとにいあれどかゝあゐの
色そ見ゑこれ玉乃青柳

同　閑居柳　兼宗卿
我宿のいつもく柳うちなびく
ちるぞ乃糸いふ我人もなし

詞　なびく。折そへてよるゝ。我る
野　飛糸柳。美者。路　立よりてこる。
行人も立とゐる。春柳の陰ふむ。
河岸の柳。川さい柳。浴にひかゝる。
ぬまてやを。鶴の糸にまぶふ。蔵なる
鶴をこ玉深みまぶふ。池岸の柳。砂
とけて鶴ゐる。波ふあやなを。堤堤乃
柳。さく柳。うゝ柳　籬まゞ花ふなびく
を。籬のそひ垣かきの柳。垣根乃
柳。庭庭柳　門門の柳。たゞ柳　田
門田ふなびく糸柳の糸。青柳の糸。
棹姫の子深れ糸。花田の糸。風ふより
ふ。ふりしへ。うちとゐる。風風春ゞ
なる。柳の枝ふ見ゐる春風。柳によゐる
春風。毎ふみぞる。風によりゐる。風
にまうする髪柳の髪風ふなづる。み
ゐるの髪。我の髪眉みどり我眉の人
眉を見立とり柳の糸我眉こもり　凡立とり
誰引眉の糸露糸にまぬく。ぬきと
ゐる。我ゐり清ふつゞぬきとゐぬ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

霧れ玉。風にみだるゝ 霞 霞にかゝるびく
又霞の糸をぬふ 烟 けゝる柳。々ゝる木の
糸 柳の糸をよりまれ烟を似たり 霞本に
又まことにたゝりまれ烟をあるなり
ふ柳ようゝ 梅 柳が枝も有金
風 櫻 枝かゝる柳の糸にぬきとめて
風よりちす 掉姫 さい姫のふる 又ま波のまま
見えそより
遠村 雑宿の新鶯の柳。雑宿の姫拍
にさゝ浪糸一雨 霞にて 雪。雪をなぐさ。
風よりて。雨にみだるゝ 故郷 ふるさとの
みゝ紅の柳。住人もなき新鶯。山 霞又ハ雪
ゝ紅の柳 入江の柳。窓の青柳。新の
青柳。池の柳。青柳。柳はみどり。
ひく柳。川柳。あたり柳。柳の眉。
柳の糸。めづり柳。若柳。柳の髪。
(狂) 春の日の蓋ねしう柳かを
柳のかゝるにとむる風乃ゝ 行風
猿沢の柳よこうて 新あり〳〵と
月はゝ雨りて 新うつりけり 常楽菴
(連) 行と来ると柳や屋どう 春水 紹巴
柳より 春の風 宗祇

(能) ゆゞれるとまげて 柳ゝ其角
傾城の賢なるはこの柳ゝ其角
孝ゝ柳ゝ 柳ゝ 柳ゝ 鬼貫
川ゝ 柳ゝ 移竹
朔日二分柳乃 柳ゝ 荷ゝ
いゝ 柳ゝ 宗因
蓬にも麻にもよらず柳ゝ 十磨
柳ゝ 風ゝ 立柳ゝ 麥柏

○柳之故事 十圍 桓温北征シテ金城ヲ経テ瑯琊ヲ治ムル時ウヘシ柳十囲ナルヲ見テ慨然トシテ曰木猶如此人何ヲ以テカ堪ンヤト云テ枝ヲ拳テ泫然トシテ涙ヲナガス

百尺 隋ノ高煩

桜提シトキ家ニ柳樹アリ高サ百尺バカリ車蓋ノ如シ父老相イツテ此家當ニ貴人ヲ出スベシト云ヒシガ後果メ宰相ニ至ル

芹 (異名) △根白艸 △水英。苦蘄 女菜 (秀) 新撰六帖

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

[illegible]
[illegible]つまんやせ川のせり
詞 春日拝。雪消の沢。渡沢小雅
[illegible]塩。東音の人。月。恵ぬるも。撫芹
小芹。深根芹。恵せり。沢の芹。沢の
雪消の芹。綠の男。少清しやと。菓
排 せりつむとこそ酒をさそへ。且藁
[illegible]根芹 [illegible]亀翁
[illegible]芹 [illegible]其角
[illegible]綠に咲る芹の花 同

女菜 芹の事なり。一説にハ
せりの外に別に忍ぐと
いふものあるといふ説あれども
七日の若菜七種。十二種ともせ
つまハあれども忍ぐの名目なし
是を以てこれ時ハせりの異名なるべし
宮 夫木 綠の女が忍ぐのもとるハ人恋
[illegible]
[illegible]

薺菜 冬至後苗を生ぜ二三月
莖とおこれ護生艸とも云

薺蒿 順和名曰なづなの和名
おなざこゝあり 宮 夫木
[illegible]
[illegible]

嫁萩 薺蒿のことにいふ 排 和
の門に郭を結ばんやよめが
[illegible]
[illegible]

嫁菜 雞兒腸とも云 排 姑もさそ
[illegible]
[illegible]

椿 玉椿 八千代の椿共云 白玉椿 書
海石榴 列々椿 伊勢椿
二階椿等別種なり数百種あり
○山茶・海石榴・樗椿 これに
皆[illegible]訓ぜ尚説多し
後編にあり

菠薐菜 異名 波斯艸。赤根艸
○菠薐。正月に植物春喰

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

穀精草　かし艸　栽星艸二三月の内田の中に生ず葉石菖のごとく花小さく丸くして白く光ありて星のごとし　本草に秋とれ

△秦椒の皮　△山椒皮ともかく　○山椒の木のかはへ

△雜菜摘　雜菜とはなりに季なし　摘は春に諸の菜のこと

△山葵　山中の水ちかに取る生ず人家にも作る二月末三月苗生ず

△獨活　△芽獨活先ずしといふ　風なきに獨活ゆへに名づく

(俳)凡ひかぬ人の蓑出をめうどが　絲桐

○一説には二月の季とするもあり

△三葉芹　△三葉ともいふ○正月末より二月苗生して專喰ふ○一説には正月にとる説もあり又二月にとる説もあり可考

△慶美の花乃匂　かぞえる　言葉え

苔脯　△海苔ともかく○海のこゝろ　いろく種類あり次に記す

△青苔　乾苔ともかく味あり　伊勢

△神化苔　△あゆのりとも云色紫にて石の上に生ずるものなり

△於期苔　海中石の上に生ず其ひこちこれなる糸のごとし

△浅草苔　江戸浅草にいづるなり　△加大苔　紀州浦多出る

△櫻苔　色は黄白櫻の花にちかく　三月の季とも云

△松苔　△十六嶋苔　雲州より多く出る

(俳)行水や何にさびまる苔の味其角

青苔や湖にさらせ碇別松　尺艸

(狂)武蔵なる浅草苔は名のこなり　はおろしの源川のもの　信海

神ぬきて海上のかりかす青苔やこゝろとさいふてやもんとやする

△鹿角草　○鹿尾草○六味菜△ひぢき　○海中に生ず形鼠の尾の如く色くろし(云)　伊勢物語　業平朝臣

むしあらばむぐらの花に稀りなん

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

云しきりのまゝ神代しつも
(俳)まゝ云あやひ也 ゆかはかれつじ其角

石蓴(ヒ) 若和布ともかく。南海の石まつゆく生を色青し

海雲(ヒ) 海蘊しかく。其形乱まゝる糸のおとし諸国より出る岸和田并對州より出る分尤よし。俗あやまりてもぞくといふ

種植 二月の季ゝ又正月也 蒿苣 茄子 紫蘇 菜菜漆

移栽 正月移し栽るを上時とし發生の氣を得て能生活する故なり廿日過より来月十日ごろ迄の中よし地氣は月に隨てさんなり汐を見てしるべし氣盛んなる時木の精皆枝葉にあり是を移し栽まゝは其性を破る移し植るゝ土を半分入棒を以て土をつき堅くしたし上はやはらかなる土を加へ地面より二三寸高くしてよし土をとるまゝ高く置べからずうえて後半月ゝは毎日水を洒ぐべし。まづ木を移し栽る時は東西南北のしるを木にしるす置て穴をいつかうえくひろく堀ゐて根のまゝらぬやうに栽べし大木を鳥居木をたてゝそれにしるすあげてたち根の折をさまやうにとべし

春生類

春の季なれども(三)如此即あるは二月にも用也

鶯(ヒ) 本朝と唐土と鶯のかさちちがふくいへども梅柳はともあふて乃雅音はいとし唐土の鶯は大さ本朝の鳩なり有身はとゞれて黄色なる鳥ゆへ黄鳥とも黄鸝とも云嘴と足は赤羽さきは黑又日本のうぐひすは黄頭鳥と名付て別物也 舜水の説なり

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

異名 尚庚 鶯黄 楚雀 博黍
黄鳥 容鳥 谷鳥 黄公 百喜
黄鸝 黄飛 倉庚 花見鳥 匂鳥
ひとめ鳥 經とり鳥 歌とり鳥 きなり

連 鶯は明れなくなる 紹巴

排 鶯は男をさうさ梁 和きなり 其角
鶯のなけは何ゆゑなりし 鬼貫
鶯の和きや渡しゆふ 移竹
鶯はとはなや梅はなつかひ 来山

云 藏玉 花見鳥の證哥
さいはんや 山里の
折にさてなりける花見鳥

藏玉 みはひ鶯の證哥
山里は雪きえすてに白ひとり
梅はおそれに袖をひらきつく

文治百首 定家
鶯の宿しめ袖るくれ 井 みまとふしなれぬ 鳥 なくて

家集 初聞鶯 定家
あら玉の年は和なり 折ゆゑき
初氣のそらにきゐる 鶯

弘長百首 竹鶯 為氏
もく志れのみ 竹の井 志 鶯の
春はうちにも子代ぞ志もれる

嘉保哥合 旅宿曉鶯
明ぬとていそれ立田の山嶺には
鶯の春や世紀の笑もりし

建仁哥合 関路鶯 家隆
雪の色はまこと白川の笑は戸に
あけ不の志れ鶯の こゑ

夫木 雪中鶯 小宰相
おのまれこ春の志るしと鶯の
なけども雪はふるの神 杉

同 故郷鶯 行能
鶯の春は志るのみやきもり
せきに志めゆふむうしこゆし

夫木 寒野鶯 家隆
おくち山谷の鶯は遠に出るな
なけどもいまだ春のおも雪

夫木 松上鶯 小大進
めづらしき松の祿ぐらを志めなて
ふしこにきたる鶯のこゑ

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

宝治百首　朝鶯　為家
わかれきて鳴くなる竹のはやしのあけぼのに
かすみよせてやうぐひすの鳴なく

金葉　山家鶯　摂政左大臣
山里はうきよの中をとほざかりこそ
谷乃鶯鳴をのこゑぞたえなく

夫木　田家鶯　俊成
まだ春をかねて鳴のそら松の尾に
あさかすみきよりの声ぞする

同　浦鶯　家隆
鶯のまつかぜ吹けば難波うら
うちかすみても渡りくる

㊂ 鳴鶯本つ木のぞいりにける。
花に百舌鳥うぐひす　すゑ
雪の家に木はなき鶯のうちに春は
まだかへりて谷 谷は古巣谷の
戸ある軒 軒の鶯 新竹の子にいる
霞むその中に霞ふかきて霞をゆき
朝ねもの朝ね子さずなく 夕
ぐれの夢。鳴ぐるかな。宿みてる
垣根きなるはなの竹 竹の鳴ぐる。竹
のなみぞふるゆる 初音いときく

春はきぐる 暮春 わかるなき 古巣
にかへる谷 友 友よるかる。友鶯 梅　梅の木は
柳ちりうき 宿は鶯。竹の月かかる。
暁ふかく鳴 花ふでつづる 巣たくも
鶯鳴ぐるの鶯　鶯の渡りしき。宿へ
すみ今春まで 待よりも鳴かれもきこる 鶯の

㊁ 狂 旅宿で 春待ちわびて 鶯乃
おそう 経もう 経も一ぶ 八ぶん 次良
梅が枝にとまる鶯の声をたんらくきちふ
に笛あるりひやりうとらむす 宗俊

㊂ 詩 鶯五字對句　同上

魚戯芙蓉水（ウヲハタハムル フヨウノミヅ）	騎擁軒裳客（キ、ヨウスケンシヤウノカク）	
鶯啼楊柳風（ワウハナクヤウリウノカゼ）	鶯驚翰墨林（ワウハオドロクカンボクノハヤシ）	詩文ノタウビン

㊂ 詩 鶯七字對句　詩礎

林間花雜平陽舞（リンカンハナヲマジハルヘイヨウノマイ）	作春啼一（ナスシユンテイヲニヲ一）
谷裏鶯和弄玉簫（コクリワウハスコウギヨクシヤウ）	始藏鶯（ハジメテヲクスヲ）

花ハ平陽ガ舞ノ手ガアソビカタ如ク　鶯ノ声ハ弄玉ガ簫ニ似タリ

春山鶯啼修竹裏
仙家犬吠白雲間

(詩) 鶯詞　唐 鄭暗

欲囀聲猶渋將飛羽未調 鶯巣立
飛ントハスレ圧羽イマダハヘツヲ高風不
借便何處得遷喬 齒谷ヲ出テ喬キ木ニウツルヿア
リコレモ巣立ノ鳥ノヿナレバ風カ手傳フヿ
ナクハイヅレノ處ニカ喬キ樹木ニウツリ
居スルヿヲ得ナントヽ

(詩) 鶯詞　鄭谷

春雲薄々日輝々宮樹煙深隔
水飛 カスミウスヽくタル空ニ日景ノトカナル二木ノ間カクレニ鶯ノ飛カフヽ
為能歌繫仙籍麻姑乞與女真
衣 能歌声ヲナスユヘ仙家ノ名籍ニモカヽルベシタトヘバ麻姑ガ故事ノ如シ

○鶯之故事

鶯梭 梭ハ女の機を織る杼と
いふりのこ鶯の梢枝を飛めゆる様子
のひまなにハかの杼を投て機をする如
くかるさしるこえ
とびもてゆるなり

羌兒笛 鶯声を羌
兒の草苅笛を吹き
をさむみたとへたるを

秦女笙 鶯の初音のあるやうにうぐいき
を秦王の女子弄玉といふ名人
の笙のおもしろ
きにあとへたり

仙韶九成 鶯の
声仙家の音樂
に似たりとぞ

金衣公子 鶯を
称美していふ詞なり羽の
黄色なるを金衣にたとへたり

鳥の囀 水鳥さへづり 并ニ
諸鳥のさへづり皆春く

百千鳥 春ハすべての鳥さへ
づるを以てもろくに鳥

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

といへとも鶯の名とかける書もおほしといへと覚るよし顯昭の説なりもしられ鳥或ハ鳥の千声なとしても春なるべし

(芳)古今百子為さへづる春ハおとにあらはれども我ぞふりゆく

(俳)河上ハ柳ハ梅ハ百ちなり　其角

△目刺　白魚のわしらえ竹の串とりつて白魚の目とつらぬきほして賣え勢州より專出る

△(三)鷽　形鶯より大に黒色声琴と調に似たり雄ハ晴と呼雌ハ雨とよふ

△(三)駒鳥　頭と左右にふりて形走駒の如し故に名づく春夏能囀

△(三)雲雀　日の晴たる時ハ高く上りて鳴え日晴といふ心を名づく

△干鱈　たらはわしらえ諸國より京師大坂等へ春ハ多くよりきたる故春の季とするべし

(俳)干てもまだ鷲の事さや春ハ雪東鯉

入用字引集　いろは　全一冊

此字引ハ世俗日々入用の文字を撰ひあつめ為に用ひざる遠き文字をもぶく故字をひくに基をもとやうに真の早引なり

須為此
市澄
市丟本
ハ為偽
板也

文化元年甲子臘月發行
浪花　順慶町心丟橋筋北入　河内屋勘助
同　北久太良町四丁目　河内屋新治郎
唐物甲四丁目　綱屋茂兵衛
京橋二丁目　塩屋弥兵衛

特1
2961

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用